談話室

# 町おこしに寄席づくりは如何

“案ずるより生むが易し”，今から５年前，田圃と畑に囲まれた新潟県は南魚沼郡大和町一村尾（ひとむらお）という所に「梅桜亭」という寄席を開いた。借り受けた農家を改良し，高座，客席，看板など，上野にある鈴本演芸場に勝るとも劣らぬ立派な（･･･）小屋と自負。が心配は客足，周囲は田圃と畑，そんなところの寄席にはたしてお客様が来てくれるか。１，２回は義理や，物珍しさで足を運んでくれるかも知れないが，４回，５回と続けば「今日はたったの３人」なんてことになりはしないか。

不安と心配が山盛りでスタートした梅桜寄席だったが，な，なんと“案ずるより生むが易し”で50人，60人，多い時は一足（いっそく）（100人）の大入り満員の日が何回かあった。田舎のへんぴな所なのに，何故こんなに沢山の人が来てくれるのか，私なりに考えてみた。

①本人がその場で演じる生（なま）芸（地方の人たちはラジオ，テレビ，カセット，ＣＤなどでの鑑賞が主で，実演を楽しむ機会が少ない）の迫力，面白楽しさに魅了された。

②終演後の打上げ，出演者と囲炉裏を囲んで一杯やるのだが，芸術芸能家からうけるショック。梅桜寄席は講談がメインだが，落語，浪曲，奇術，俗曲などの色物の他，楽器演奏（フルート，ギター，シンセサイザー，三味線，太鼓など），舞踊（日舞，民族舞踊），クラッシック，ジャズ，陶芸，絵画，押花，お茶など異業種交流もあり，アーチストの感性，感覚にえらい刺激をうける。

③春夏秋冬にあった催し物。春は山菜採り，夏は魚野川でのアユ釣り，秋は八海山，駒ヶ岳への登山，冬はスキー，雪まつりなどへ参加する都会の人たちとの歓談の楽しさ。

寄席参加は，笑いと涙などの話芸によるストレス解消。出演者との一杯が刺激，触発。異業者との交流，親睦による情報入手，交換などが得られると，足しげく梅桜亭に――と分析をしてみたが。

今，地方にお邪魔をすると，町おこしなどの活性化を耳にするが，“寄席づくり”は如何ですか，とすすめてみたい。腹の底から「ワッハハハ」大きな笑い声は，なによりの元気印になると思うからだ。

先ず寄席づくりは，誰にでも簡単にできること。地方には廃屋になった家や，

使わない部屋が沢山あるから，ちょっと手を加えただけで立派な寄席ができる。例えば襖や仕切り戸を外すだけで50〜60人入れる客席ができ，高座は長テーブルを積み重ね，その上にひもうせんを敷き，家にある屏風を立てれば豪華な舞台になる。くすぶった柱や梁がなんともいえない雰囲気をかもし出す。これは都会の寄席では真似のできない，地方独自の演出である。一般の家屋でなくとも稼働率の低い公共施設が多いので，それらを利用するのもよい，歴史あるお寺，神社などもよい。

次に観客動員，看板やチラシなどを協力して製作する楽しさ，入場券を手分けして売り歩く連帯感。中入りや打上げに地場物の山海珍味，田野の野菜など使えば消費拡大，宣伝になる。出演者の追っかけ（梅桜寄席では出演者の追っかけは常時10〜15人），催し物への参加者（例えば山菜採り，田植えツアーを募集したところ30人近い応募あり）との交流親睦が町村への活性化に。毎月の都会からのお邪魔数は少ないが，年間を通すと大変な人数になる。その人たちが町や村へ落とす金額，またお願いをしないのに「〇〇のなになに，いいですよ」と吹聴して下さるクチコミのありがたさ。また田植えや稲刈りなどの実体験は消費者の農業理解につながる（寄席づくりにはこういった，目に見えないところのメリットが沢山あり）。

異業種交流，寄席開催日にあわせ，炉端で陶芸，絵画，押花，華道，茶道など芸術鑑賞とともに実際，花を活けたり，お茶を楽しんだり，或いはロクロをまわしてヤキモノを焼いたり，三味線，太鼓の叩き方，民謡ばかりでなく端唄清元などの粋な踊りを一緒に舞ってみたり･･･ただ客席で楽しむだけではなく自分たちも芸能芸術に挑戦してみる（こういう意欲が活性化に一番大事なことと思うが如何）。稲藁で宝船を作る人がいて，あまりにも見事なので，新年の床飾りに如何ですかとセールスをしてみたら，30個の注文があった。寄席づくりがきっかけでおもわないところから交流やビジネスが･･･。

如何ですか“町おこし村おこし”に寄席づくりは，梅桜寄席実体験の宝井琴梅が指導させていただきます。

**（梅桜寄席主　宝井琴梅**・たからいきんばい**）**